

## 漢詩人・大沼枕山

——俳人友昇をめぐる人々——

漢詩は、中国の言語や文字を使って、中国の詩の形式に従って作られている。歴史的には近江朝の時代（六六七—六七二）から明治時代の後期（一九〇九）まで、千数百年間にわたって作られており、その起源の古いことにおいては短歌につき、日本文学のなかでの一つの重要な分野をなしている。近江朝の時代、天智天皇は漢詩文を奨励したので、皇族・貴族たちによって漢詩が盛んにつくられた。平安初期は、弘仁期（八一〇—八二四）を中心として漢詩文が流行したが、やがて、唐風文化の規範から脱し、国風的なものがしだいに興隆するなかで、平安後期になると漢詩文は衰退した。中世、鎌倉時代から室町時代（一一九二—一六〇三）へかけて、漢詩文は五山の僧侶を中心に行われ、五山に生まれた漢文学は五山文学とよばれる。近世、江戸時代（一六〇三—一八六七）は、儒者たちによって漢詩文が作られたが、江戸時代後期（十八世紀後半）は、漢詩文が一般文人の間に浸透した時期である。安永・天明の頃から幕末に至る約百年間は、江戸をはじめ、京、大阪、いわゆる三都における文化の爛熟、地方都市の文化的発展を背景として漢詩文が盛んに行われ、多数の詩集が刊行された。漢詩が一般に広く普及し、作る詩人とこれを読む人

々の数がおびただしくあったという点では、江戸時代の後期にまさる時期はなかった。この時代に激増した知識階級の人々の思想・心情を託した文学になっていたのである。

続く、幕末から明治時代にかけての約半世紀は、漢詩文に四つの流行の時期があったという。それは、明治十四、五年（一八八一—八二）頃、明治二十年頃、明治三十二年頃、明治四十一、二年頃で、その中でもっとも盛んであったのは明治十四、五年頃の時期であった。この時期は自由民権運動がもっとも高潮し、政治的権力と文学的表現との緊張が極点に達した時期である。社会的背景を抜きにしては明治時代の漢詩文はとらえきれない。

漢詩のもっとも隆盛した江戸時代後期、特に文化文政期には中央と地方の文化の流通が活発化するという現象がみられる。三都には文雅を専門とする職業文人たちが数多く生まれ、地方では豪農や商人層を中心に文雅への関心が急速に広がっていた。これは、江戸時代中期以降の商品生産と商品流通の活発化に起因するもので、商品経済の浸透をうけた村落には様々な文化的現象を惹起させる糸口がほころんでおり、生産力の発展による余暇の増加と、教育水準の高まりとによって従来、大都市のみ専有していた文化が地方へと広まったのである。

福生周辺では、多摩川上流の商業聚落地・青梅に早く活動の跡を窺うことができる。青梅は、文化文政期に織物を中

心とした商業地として経済的に成熟しており、商業活動に関わる富裕商人の中に、在村文人として活躍した人々が多く生まれている。根岸典則は、文化文政期に先立つ寛政期より、漢詩・和歌などを作り、この地域に漢詩壇ともいふべきサロンを形成しているが、青梅の木綿縞仲買いの有力商家の出である。青梅同様、織物を中心とした商業地・八王子では、文化初年頃多摩地域に影響力を有した女流俳人・松原庵星布が俳壇を築き、また、南多摩地域、小山田村には、国学者として高名な小山田与清が生まれている。このように多摩地域にも多数の地方文人が輩出しているのである。

江戸文人たちの多摩訪問は、漢詩人に限ってみれば、まず江湖社の詩人・大窪詩仏が小野路村の橋本政誠に漢詩を手ほどきしている。さらに、嘉永年間には小野路村近辺の豪農たちが、遠山雲如を師とする漢詩壇をつくっている。遠山雲如は梁川星巖の玉池吟社の漂泊詩人として高名な漢詩人である。雲如とならび多摩地域の豪農たちに大きな影響を与えた漢詩人に大沼枕山がいる。大沼枕山の人脈は多摩各地に広汎に散在し、多摩の豪農らは枕山から漢詩の指導をとおして大きな影響を受けたといわれる。また、明治初年に横浜へ移住した平塚梅花は、度々、多摩の地を訪れ、自由民権運動の指導者・石坂昌孝をはじめとする小野路村の豪農たちが、多摩梅花同人を作り梅花から漢詩の指導を受けている。このように江戸に近い多摩地域は、数多くの

高名な漢詩人の影響をうけ、豪農層の中から多くの地方文人が生まれた。

福生村に生まれた俳人・森田友昇は、明治初年に武蔵国（一八三四）の俳人として名が知られているが、天保五年（一八三四）三月十六日に森田与八の二男として生まれ、本名を太四郎と称した。森田家は江戸時代・元禄頃より明治初期に至る間、中福生大学と称する寺小屋を開き、村落内子弟の教育に携ってきた。友昇は福生村の豪農で在村俳人として名知られた福泉舎友甫に俳諧の手ほどきを受け、後に、江戸に出て宗匠・富所西馬の門に入って更に学んだ。明治八年（一八七五）には『横浜地名案内』を嘯月庵友昇の名で著わし、やがて明治十一年（一八七八）春には、八王子の有力者たちから松原庵の継承を請われ、翌十二年晩秋、八王子の大善寺で松原庵四世襲名の俳筵を開いた。披露の句集『浅川集』は、全国の俳流を纂集したもので、江戸の宗匠、春秋庵幹雄、其角堂永機をはじめ、多摩の俳人、青梅の好々居白左、国分寺の宝雪庵可尊など多彩な顔ぶれが見えるが、序文は横浜の老漢詩人・平塚梅花が撰び、野津田村の自由民権運動家・蟠斎石坂昌孝が筆をとっている。俳人友昇の交友関係は広く、女流画家・奥原晴湖、尾崎紅葉、大沼枕山など非常に幅広い人脈があったようであり、福生及び周辺地域の歴史、文化を考えるうえで俳人友昇の存在は見落すことはできない。

子孫 孝 志 五 年 出 後 中 天 珍 龍 八 桑 山  
 千 秋 富 嶽 到 仁 海 雲 浩  
 邊

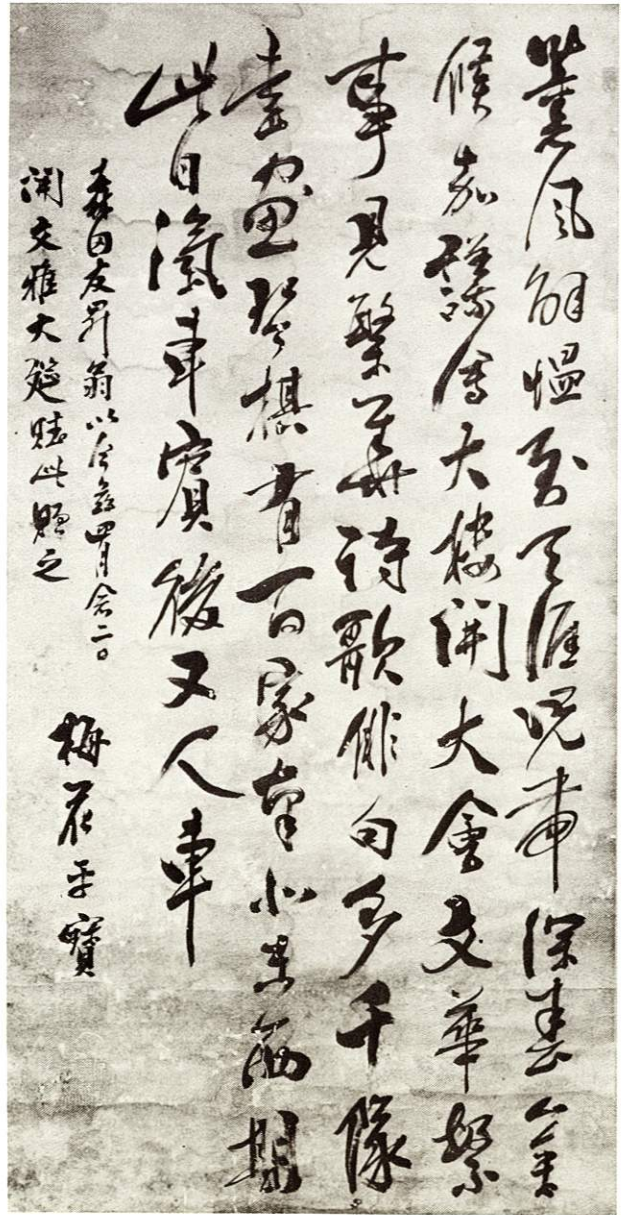
槐山史

1、大沼枕山 紙本 縦二四六 横四八



2、大沼枕山、他 紙本 縦三七三横四四

3、平塚梅花 紙本 縦六・三横三・九



4、森田友昇画像 紙本 縦三・五・三横六・三・七



5、大沼枕山 紙本 縦四・四横四七二

箇老人星曳杖種梅然福祿貌其村  
大神權時多祥年天女經白道是春  
齋經極釣流龍躍長槍護法惡魔  
勝善他希袋百和出在次得更七童琴吹  
成七福神篇 槐山史

6、大沼枕山 紙本 縦三・七横三・六

湖烟破更石橋橫漁屋氣香其既  
照明手到似還三粒當承一從苦持禱  
我齋 湖堤夕陽 槐山

屋上雪中雞  
 青山淡後曙  
 應趨前夜期  
 幽人抱琴去  
 洞門窈窕深  
 花擁水窮處  
 訪友携

8、大沼枕山 紙本 縱三·三 橫三·六

高堂幽室  
 宿夢何州  
 只因言不  
 改  
 景  
 佳  
 陰  
 如  
 煙  
 霧  
 籠  
 翠  
 巖  
 中  
 露  
 華  
 平  
 龍  
 宮  
 浮  
 彩  
 運  
 探  
 傳  
 夢  
 花  
 候  
 竟  
 老  
 何  
 辭  
 燥  
 燭  
 游  
 梅  
 石  
 君  
 招  
 飲  
 於  
 湖  
 樓  
 次  
 韻  
 槐  
 山

7、大沼枕山 絹本 縱三·七 橫三·九

遠向蕪波駐紮  
旆旌旌旌  
定中區頃志  
共箇天孫光  
照詠  
前軍  
吾日  
烏神  
武王  
呈槐

9、大沼枕山 紙本 縱二二七 横三

奪見五  
檣賊  
衰愁  
持人  
奪取錦  
連翻  
飲告  
之子  
印芳  
重日  
月鏡  
又福  
捲在  
肩  
村上  
義光  
槐心  
倚史  
存

10、大沼枕山 紙本 縱三五 横四六



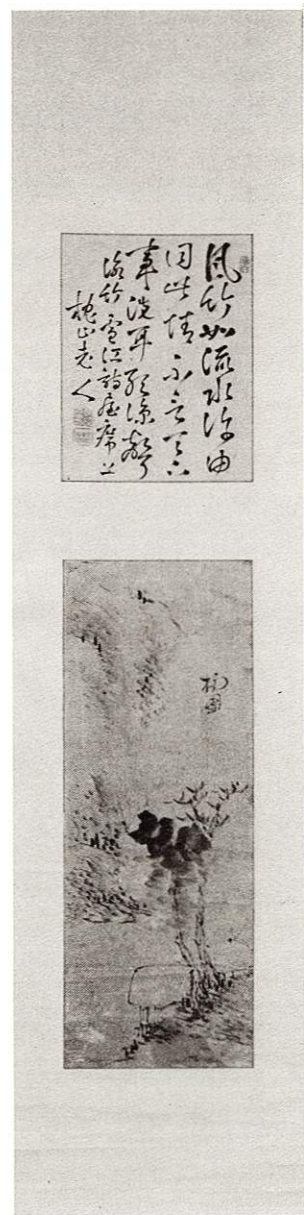
雨後書堂暑半旬  
 為杆碧樹  
 秀于人  
 吹去詩學  
 潭仍舊不  
 蕉心日  
 新  
 雨後  
 枕山

11、大沼枕山、他 紙本 縱一〇五・四 横六・二

重如九月折  
 五誰扣一  
 望我風葉  
 本降老  
 籛接陰  
 就得偶  
 新梢  
 弄色  
 翰生  
 雙孔  
 程似  
 蓋  
 青晴  
 道  
 茶  
 舞  
 鳴  
 琴  
 隔  
 畫  
 牖  
 好  
 待  
 夜  
 苔  
 綠  
 把  
 以  
 法  
 人  
 顏  
 年  
 未  
 棄  
 槐  
 山  
 序

12、大沼枕山、他 紙本 縱二六・二 横四・七

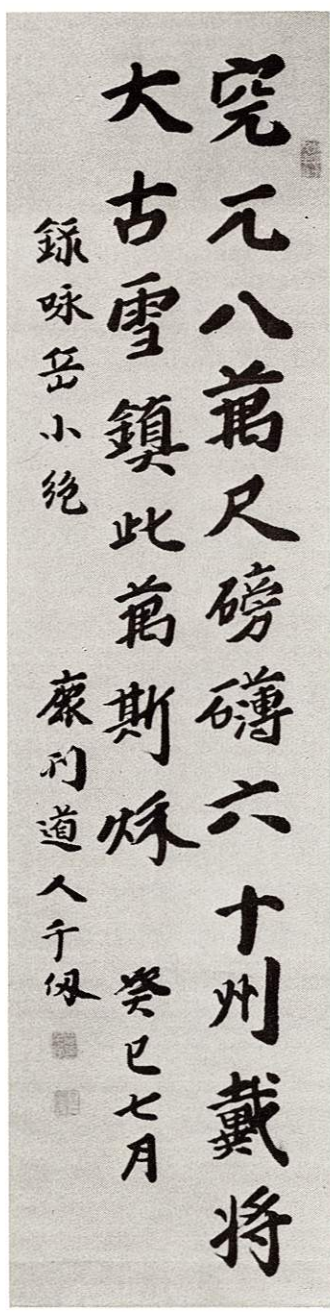
13、大沼枕山 紙本 縦三・六横三



14、大沼枕山 紙本 縦三・五横三・二



15、岡鹿門 紙本 縦三・六横三・九



究元八萬尺磅礪六十州戴將

大古雪鎮此萬斯煉 癸巳七月

錄味岳小絶 康利道人千仞

16、小野湖山 絹本 縦三横四

出烟霞又入煙霞  
 不覺寒山客臥床  
 東風容易吹髮去  
 一棹病了兩湖光

西遊雜詩之一  
 湖山醉宿

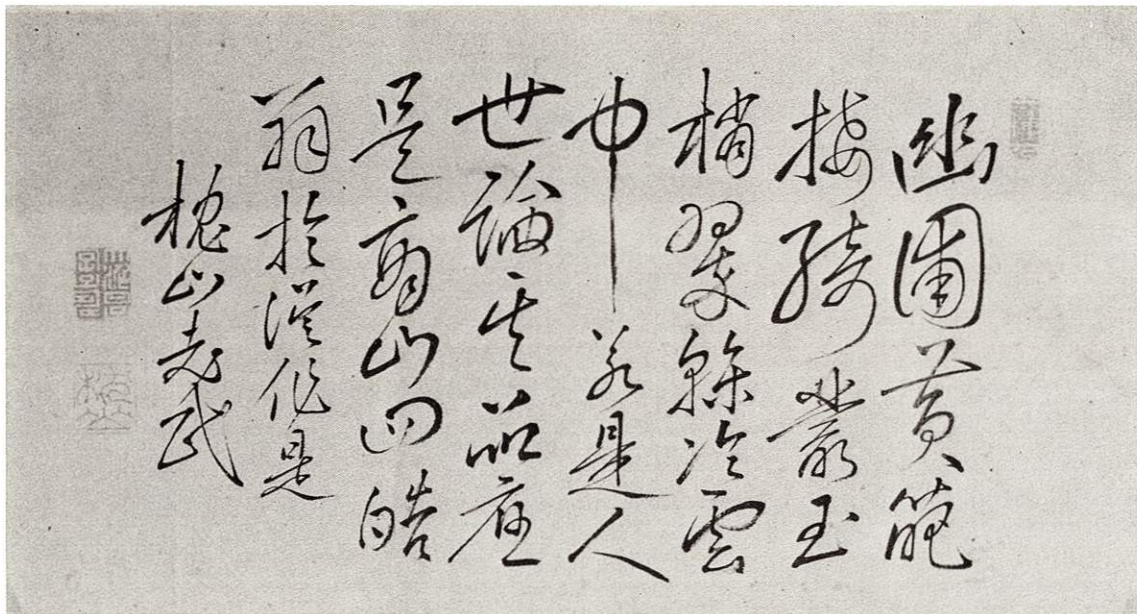
17、遠山雲如 紙本 縦二横三

隆黃應留地  
 徹曉振林風  
 也自攜簪  
 帚奚唯役僕  
 僮真聲似  
 夢分小劫  
 覺烟中

此  
 日秋光  
 臨誰  
 忘竟  
 碎紅

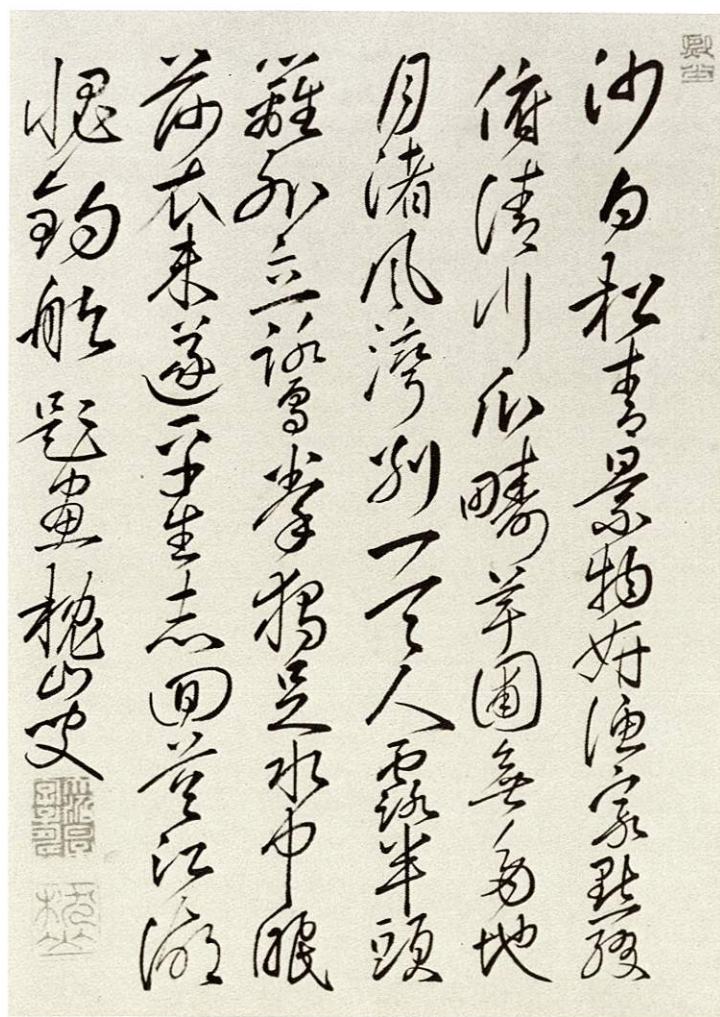
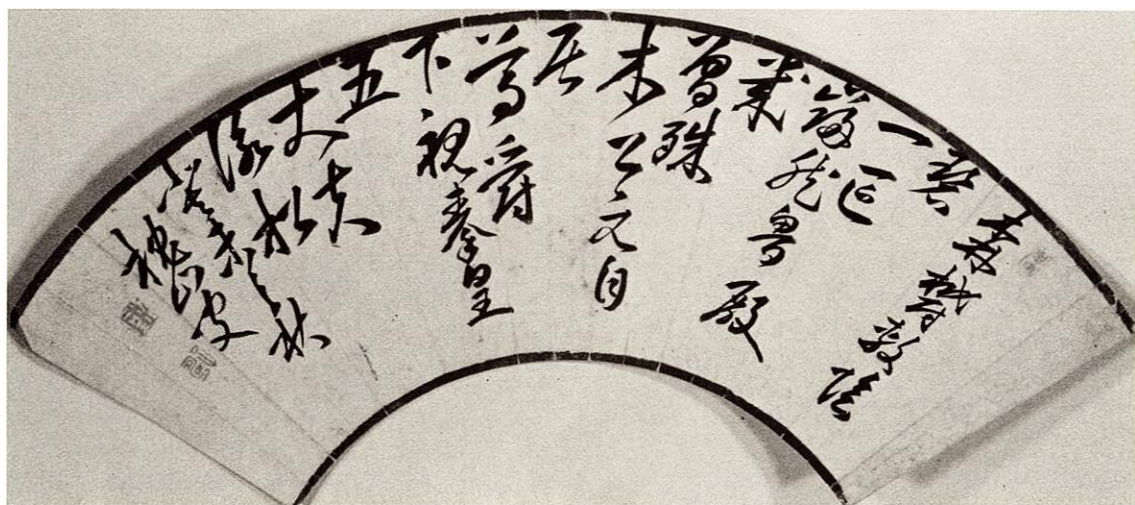
掃葉  
 雲山人

18、大沼枕山 紙本 縦二七横四〇・五



19、大沼枕山 紙本扇面 縦三五・三横四三・五



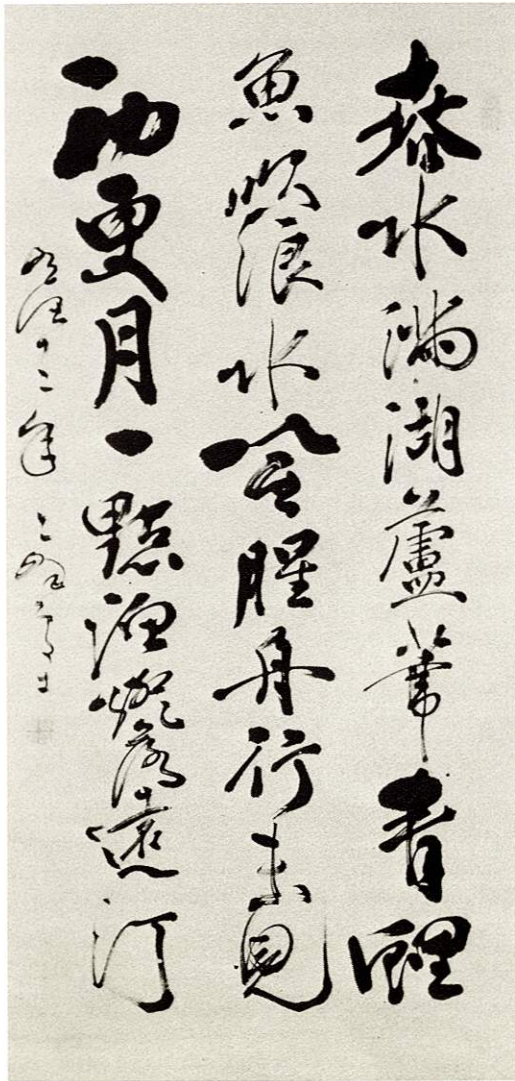


釣耕家世編衣籍  
從學訪書疲力因  
苦臆問何所獲言  
賺我十年  
保姓松塘

22、鱸松塘 絹本 縱三橫三

酌酒會臨泉水  
抱琴好倚長松  
南園露葵朝折  
東谷黃梁夜春  
王右軍田園志松巖在峯云

23、秋巖 紙本 縱三橫三六



25、高林二峯 紙本 縱三四横六四

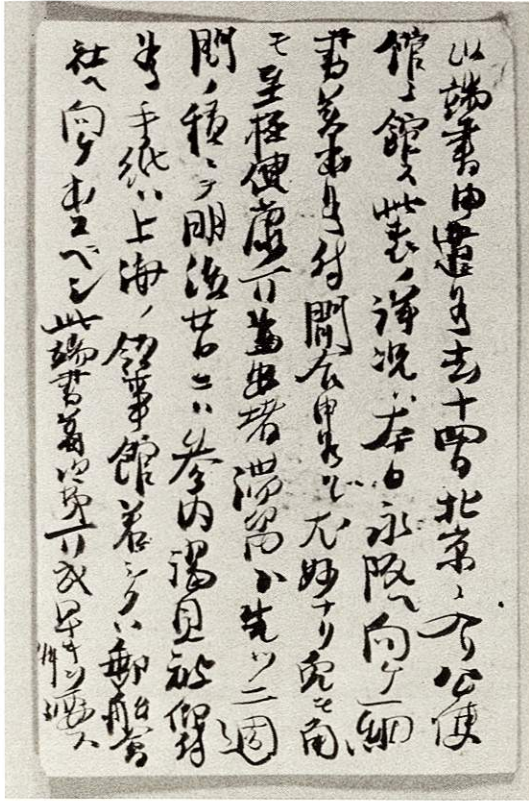


24、藤弘庵、他 紙本 縱二七横四三

醒雲落日暄青湖白山氣鴻濛靈嗜薄鏗泉  
海閑湯沐  
雁雲落日暄青湖白山氣鴻濛靈嗜薄鏗泉

出於此外也  
海御風物不能  
詩翰即臆口  
竹添井，居士  
春氣候相所示  
熱海客樓用  
經魚古  
價好據衣  
槐南森大集  
天年一月念首





28、中村栗園 紙本 縦三五・五横六

浩氣還太極  
丹心未改恩  
尚存忠義補

七十五首  
弟敬和

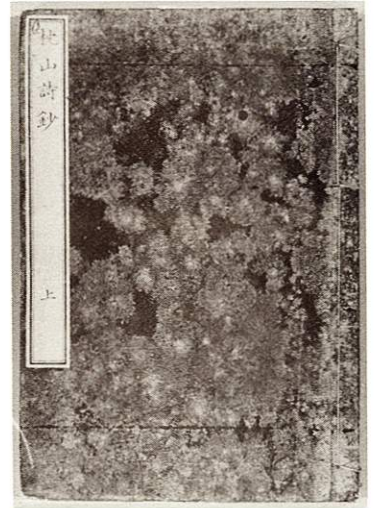
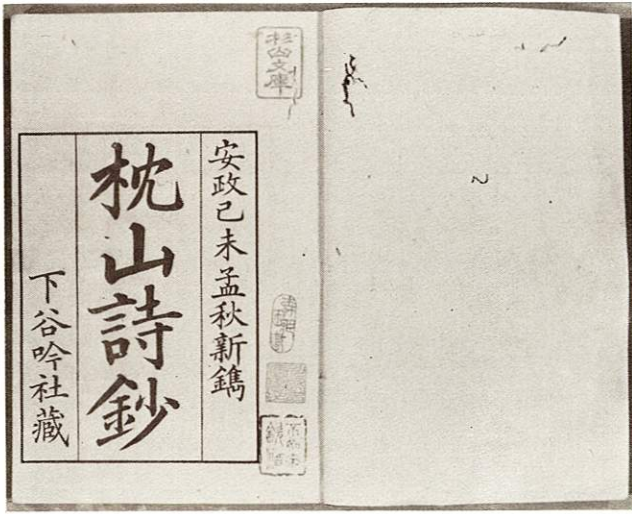
中村栗園詩

29、齊藤拙堂 紙本 縦一四・八横二九

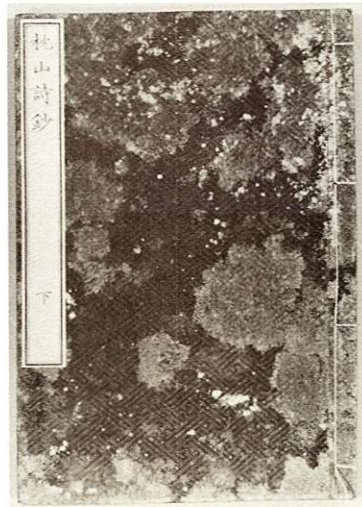
松栢紅馬柵  
古唐漢古詩  
蒼蒼巨野  
百停停  
於幕  
連十里  
有魚  
之  
海  
多  
古  
旨  
其  
時  
自  
然  
一  
生  
皆  
誰  
托  
隨  
燭  
灰  
此  
若  
不  
見  
西  
海  
幸  
校  
至  
京  
法  
山  
川  
沒  
我  
屋  
至  
苦  
世  
所  
不  
時  
給  
終  
身  
生  
理  
太  
難  
幸  
一  
收  
福  
禮  
性  
其  
辭  
身  
任  
而  
征  
州  
原  
風  
一  
終  
父  
老  
兄  
不  
冠  
聚  
德  
殿  
上  
至  
國  
日  
妹  
氣  
浩  
氣  
祥  
雲  
滿  
挽  
國  
大  
千  
花  
界  
日  
上  
信  
此  
樂  
平  
存  
氣  
五  
下  
浮  
海  
介  
時  
拂  
以  
敵  
神  
兵  
戎  
蕃  
使  
奉  
琛  
琛  
珠  
貝  
玉  
日  
洋  
夷  
畏  
我  
威  
無  
難  
進  
德  
德  
出  
世  
信  
幸  
理  
論  
其  
待  
服  
孔  
如  
至  
兵  
火  
責  
一  
生  
一  
方  
一  
日  
安  
不  
好  
風  
入  
畫  
圖  
一  
生  
一  
旁  
巨  
野  
松  
栢  
堂  
生  
茂  
天  
王  
國

齊藤拙堂寫面

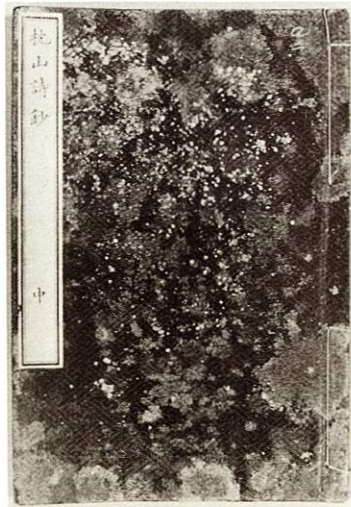
神海全人空舟面



30、

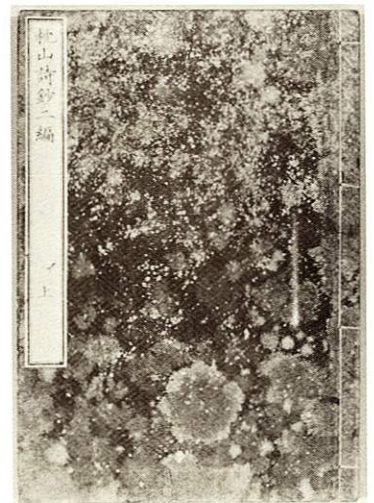
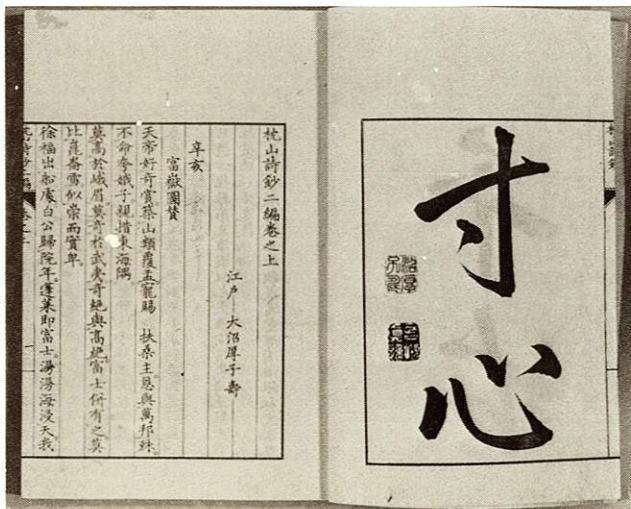


32、



31、

30、  
31、  
32、  
枕山詩鈔 上・中・下  
安政六年（一八五九）刊 大沼枕山著



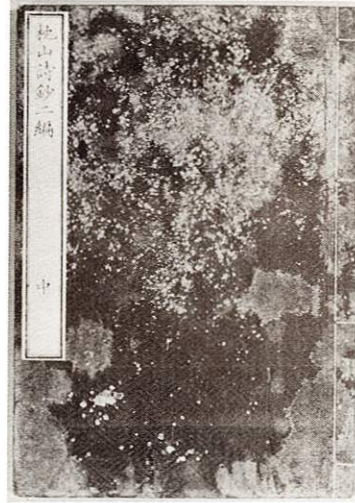
33、

33、34、35、

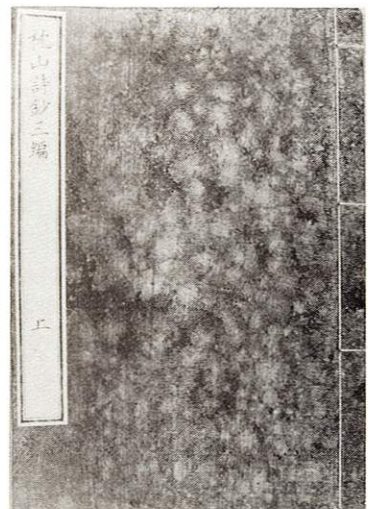
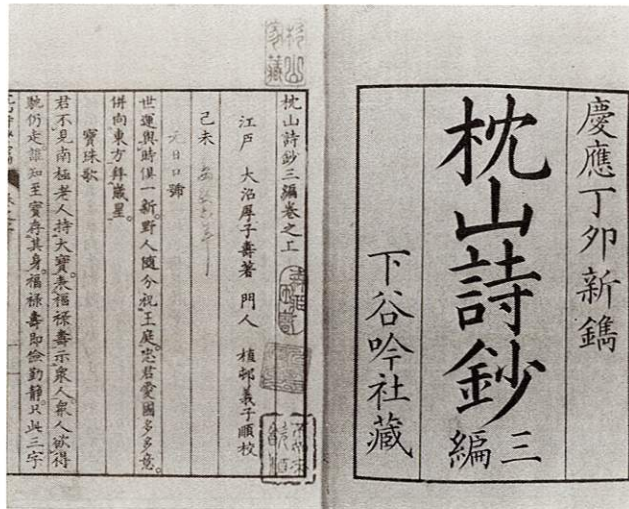
枕山詩鈔二編 上・中・下  
安政二年（一八五五）刊 大沼枕山著



35、



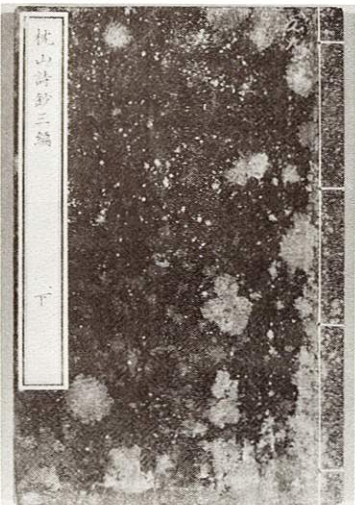
34、



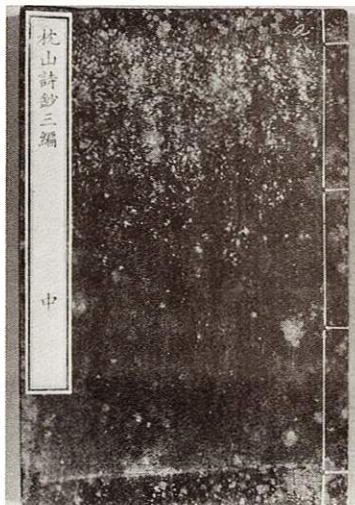
36、

36、37、38、

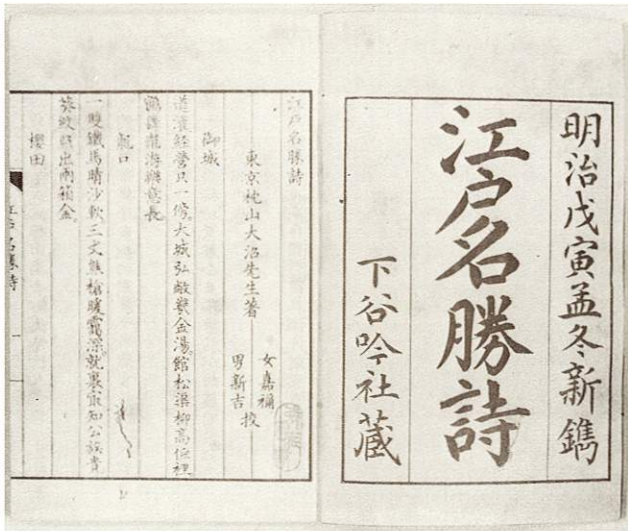
枕山詩鈔三編 上・中・下  
慶應三年（一八六七）刊 大沼枕山著



38、



37、



問若堂尼也不知

鳥越祠

靈祠則歷已十春鳥越何須說舊新日本靈算兒復命

恰宜雙勇祀君臣

兩國橋

香塵拾遺靈著新朝蒙戎版蕩清晨到哉一箇養臣某

惟留赤坂四十人

淺草門

聚華似瀟易沈酣馬道控久無柳陰一旬我能描與某

湧金門外已春深

首尾松

首尾名標綠始吉佳期吾輩此松陰羅叟雖若多情在

櫻櫻翠葉送好音

龜鹿渡

利沙大川波自來本柱在眼掉藍輪享元詩客言何雅

嚙傲風流白馬津

花川戶

江畔人家帶夕晴波光樓影自橫樓市間豪俠紛多少

可有當年助六名

待乳山

待乳山

兒如待乳觀觀神宇港高結構維前岸好花仍好月

止頭停在一眸中

新吉原

大門歲令比條玉可知與與可撒撒咫尺掌知風物掌

烟花紛繞五街長

淺草寺

篳入雷門引望長聲然願若十間堂青樓一寸八分像

能養百千嬌女郎

久米平內像

游遍西州氣魄然若現製像古而鮮丈夫託意漆欲仰

形火盆割學坐禪

燒池

老姥一庵經製卷校實奪物及千人少年投宿愛娘死

童料飽骨為化身

鏡池

一盞睜龍古鏡池淺茅原上兩然燃燈他慈母相隨雲

水面春涵美少姿

海禪寺

一洗道臣妖校校聖若此境見觀臨主僧名字從頭行

秋覺真佛印上心

東本願寺

松庵竹院自幽深法教則他如願心盡立連天閣萬宇

一雙黃鶴畫雲陰

石庚

帝矣新田宜少匪差原駭賊昏存狂四十六里成風送

足利足跡是此場

千葉城

太守古城人尚德想羅祖遊著真先飲今唯剩樹頭水

瘡眼分明列且鮮

齊藤實成塔

不知層塔祭為神

玉姫祠

水鶴啼風水風雁著荻洲蘆刻刻青窠好留舟煙雨夕

玉姫祠叫捨蓬殿

根岸里

擊雁向背水東西家富翁翁好隱棲十有七言吟夫絕

林鶯啼了又田鷄

不死池

蒼澤池邊任此誰無市費只那氏早偏不潤霖霖秋涼

不死池

爭雲殿靈瀨織津

寬永寺

文珠樓內瑠璃殿全碧輝煌歷畫萬昔時取信紅毛語  
如此奇觀萬國無

皓月亭

灌公寫政是心開皓月亭高景灑然逐者感思思無延  
無緣故上有良緣

湯島天滿祠

靈宇依然城址開文明創建規模顯思想見當年  
十項美田極百林

神田祠

天平創立貴神祠天慶叛臣陪饗之松磴盡頭多景物  
升他頭備與與奇

根津祠

福神外而祀忠臣蘭宇古蒼難世塵况看君前遭  
朝花楓葉血紅新

日暮里

真箇令人忘日暮遠山近水入眸明此中八藤羅香好  
我愛復如聞鹿聲

道灌山

數劫如城曲又深懸崖南畔樹成林蒼翠徒耽好風景  
可見黃龍經盡心

鹿島山

山蒙鐵壁行偏竹松帶疎樓看轉則試上小巔既遠目  
一際微白是荒川

王子稻荷祠

老杉森列蘇祠堂吞景取推除夜良八國無宮殿危物  
翠園吹火調孤王

瀧野川

不動應泉動即飛辨財祠畔蔡突霏風煙翠做小江島  
宜當節操披錦緋

吉祥寺

門臨檀林啓大扉檀香匝地佛香飛麻衣鐵鉢僧無數  
結夏何之解夏峰

傳道院

楓林壯火著千緇踏上除米款似之我愛清幽方大後  
蒼崖斜把白蓮池

牛天神祠

遺靈託此事新哉迨邊管健壯野來今日風流牛背穩  
橫斜手把一枝梅

日暮門

臨路候門赤觀燈令人看戀忘斜陽大扉擁出觀勝美  
誰是影之甚五郎

阿七墓

麗娟甘受火紅熱阿七癡情也逸群兒女豈知他罪障  
證於香草展孤墳

遠坂

與盛經年藤紫增相逢之阪小嗚嗚都人士女忙忙過  
誰憶風流玄及藤

目白不動祠

下臨懸崖百尺危祠堂寂寞鎖煙霏不知神與世相欺  
白眼名存人到稀

高田馬場

松樹陰中巨萬頭大頭公恰費觀壁魚鱗鶴翼空堂疎  
惟有蒼髯更獨知

雜司谷

親多道公法力增雜司谷裡瑞雲興源師此處傳宗妙  
六老僧應七老僧

玉川上水

玉川十里引來均宜飲宜茶水有神可見承應遺德大

龍吟八百八街人

十二社

去裏一條長供異青松數樹不知春鐘離驛道馬蹄  
有上摩訶此沒塵

冰山祠

松繪園祠翠蘊蘊一區靈境使人感風流佳蹟吾欲  
翠出蘇川小六宮

今丹城趾

疎草莽一古忠英武野揚威置假城曰子瞻藤澤不  
只傳公井四郎名

長谷寺

杉松鬱茂五秋春中有古祠香火頗端立添光二丈六  
大悲現此濟生身

金玉櫻

萬死難逃逐主公豈道帝得賜花紅我言先是應移此  
一樹解明勇際宮

目黑不動祠

高靈安排不動神錢僧窟古龍森森樹裡珠堪  
目黑寧知世上人

天口池

上古名勝寺

竹樹叢森園古廟煙雲點漢鎖倉池如今無復勝舟  
萬片浮萍合不難

芝口門

外郭門高正德春西諸侯伯朝朝頻欲呈四海一家  
解事祝融林作塵

慶石山

半青翡翠巒曲閣多景誰面秘此閣確六十層登未盡  
總深房深隔洋山

青松寺

小小檜林連古卷讀書聲各取琅琅精修從衆知多少  
真有道氣在吉祥

神明宮

黃蓮為市暖秋風氣與神明便得通刺有石泉添聯北  
全經來葉小樓宮

增上寺

匹人而單諸王若其只芝山僧正嚴憶起三年方丈裡  
焚香薰下講詩書

金杉濱

隱海諸山翠住地納涼野酒小亭畫魚蝦似說此洋美  
漢利爭投新細水

上古名勝寺

赤羽橋

一條川水淺涵春變出名山景便斷想見當年詩道  
我欲尋仙老十人

龍土

果門未戶幾諸侯不用降龍豈獨楓誰記當年漁獵王  
據山浴水小高城

源細塚

古墳千歲古松除春在使門深又深遺墓小池唯半月  
英雄尚印鏡如心

如來寺

陳跡極闊白樺陰難終外落日沈力士示威開士愛  
如來前度人深

義士墓

墓門深鎖闔避秦烈義子今感世人將道杉杉森鬱裡  
尚存卅七活忠臣

東禪寺

伽藍咫尺浪層層海上禪林法相增一部江陵傳第古  
丈方有箇善詩僧

谷山

我有蒼茫懷古心山頭白盡結層陰條杉戰跡沒雲  
上古名勝寺



黃峯著花深又深

高輪

長街足下湧蒼然。歷歷造山入眼多。七月夜偏梅廿六。

拜他城學彌陀

如殿山

起伏山台俯海頭。將軍衙處殿幽幽。漢茶一碗鐘風味。

款接西來裝大候

東海寺

逃世還逃古澤庵。整羅開在萬松林。不磨不琢三磨石。

天地人間素懷心

寄水明神

樓柳陰涼曲更幽。一條迤邐接城頭。家恩久早神僧禱。

七井依然湧碧流

洲磯

拾得揚蝦上巳天。潮乾沙色雪鮮鮮。弓鞋決意踏東海。

兒女時為眷仲連

永代寺

朱門碧殿翠嶼岫。自是深川第一神。松色寺名俱水代。

假笑發現太平春

三十三間堂

觀音十手巧難過。與良師宜有記。三十三間管命中。

橫島若船不堪多

中川

總勢常如影。中川關外早潮生。高師津史漫相見。

蓋於堂邊呼應聲

龍井戶

京行樓成第太遠。紅梅綠橘逗芳嬌。寒春羅綺舞兒女。

法德攀欄渡數橋

妙儀祠

妙儀祠畔講春輝。印日喧聞亂鼓聲。好是於於小水聲。

早梅香裡插符籙

臥龍梅

滿園蟠屈古花清。誰記龍姬金粟生。水府賢侯曾枉駕。

躍龍却命臥龍名

五百羅漢

野寺窗窺佛印門。堂形屈曲梵風存。誰知卷大蟬堆院。

安賣西來五百尊

吾妻森

野營營營接海磯。數間石殿擊高歌。二千年積翠瀾穩。

連理橋邊祭極姬

聖德太子祠

中樹靈塔古堂風。少像儼然溫且雄。志學過未幾一歲。

曹曉此際更曹曉

三市祠

咫尺便求足指祠。到門小貯費沈思。冥船買嶺一聯語。

清曠供觀先可知

長命寺

萬竿千枝接映勻。樞安此處家呈。新花花歲歲自相似。

長命寺前長命春

白賴祠

松青樓盡心春陽。覆上風翻羅綺香。誰似此神多靈福。

白賴祠盡萬紅妝

隅田川

東海迤邐隔水濤。慷慨京關土意沈。沈誰知開雅唯皮相。

中負幽情寄渚翁

秋葉祠

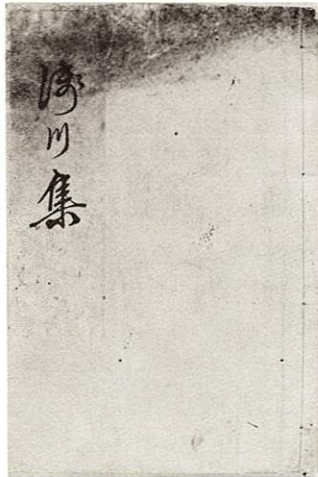
老松心腹知泉燕。數畝曲圍一鑑池。此境春花極數絕。

枉將秋葉盡神祠

水神祠

粗如履塵街。鑿鑿水神祠。外水滋於結。結羅遠送就於佳。





序  
凡天下之物集於所好，二頁無籍，集於學士之家，長館大館集於勇士之家，風流圖畫集於好享之家，風雅器物集於能諧之家也。然則物雖專心，人有好尚，好尚之寓物自來集也，所謂同氣相求，同類相感者耶。森田友昇者，武藏國玉川



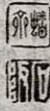
之涯，多摩里之人也。少時學經史而性好俳諧，聞其道於田村氏，然後來江戶，復業於富所西馬之門焉。移住橫濱，以修高法矣。夫為俳諧之道也，貞德氏季玲氏為首唱，至芭蕉翁氏，別開一門，搜軌範於十哲，謂之正風。雖托情於山花塵月，其為教誨，蓋在明人倫之道也。室摺俗談平格乎，嗚呼！祖翁元祿七年甲戌十月十二日逝，壽五十一矣。  
仁孝帝御宇，天保十四年癸卯十月，丁祖翁百五十回忌辰，以是九月，宣文，賜花本神號，距明治十二年乙卯，百八十六年也。於是皆知正風遺教，有益於世，而非俗談平


話也。頃者俳諧者流，乖祖翁之遺教，正風二字而十七之言，信口書之，以為得俳體也。故世人以俳諧為小伎也，惜哉！正風遺教，竟為空言矣。今也，友昇確乎，以此道教都鄙少年，少年以業之餘事，而肅月吟花，能以此道，得修身齊家也。於是乎，遊手博戲者，殆至于掃跡由是觀之，其有益於世，豈謂之於小伎哉。語曰，人能弘道，非道弘人。焉乎誠也哉。友昇之鄉里，三里程有驛，稱八王子，之曰桑都，有川曰淺川。文治年間，西行過此，有歌曰，  
古川淺川富多新夏多桑都言風火  
貞享年間，祖翁來於此地，有句曰，  
西行の草鞋もわかれの鶴寛政年間

俳諧女流，星布者，求祖翁駐杖之處，構一草庵，名曰松原，蓋取祖翁之句，命名者也。星布有句曰，  
或馬中其重子業の力なり乃以研好之道，大開俳場，於是深川芭蕉著什器，四山瓢等，集於松原，著其瓢長二尺五寸，周圍二尺五寸，乃詩面四山二字，五絶句，漆書記之，詩曰，  
一瓢重黛山，自笑稱箕山，羨習首陽山，這中飯瓢山，其後星布以文化十一年甲戌十二月卒于菴，壽八十三也。距今六十六年也。而松原著之嗣號者，有二焉，而後純矣。去歲戊寅之春，鄉人谷合、田野、齋、城內、小澤、岡、木、田村、川口、之七氏，招請友昇，謂之曰，子好俳諧，且子

之齡，過知命，家政付兒，宜以俳諧為閒生，行七氏周旋，為松原著嗣如之何。友昇欣然諾之。於是四山什器，星布書記，盡付友昇矣。所謂天下之物集於所好矣。今茲乙卯，傳遞嗣號於全國俳流，而纂集於秀吟若干，撰而以付櫻木，將同千歲松，以傳不朽。題曰淺川集，乃卜晚秋，於驛之大善寺，開俳遊招請，都鄙之諸彦，感為祖翁神德，正風教道，有益於世者也。余亦赴焉，聞清斬麗句，而欲以鳴之也。是故援筆題其額末於卷首云。  
明治十二年乙卯之晚秋  
橫濱七十一老儒梅花平塚寶  
撰於秋錦山房黃花閣

此書は...  
 徳語の集つたる古今...  
 本...  
 藤...  
 同...  
 元...  
 こ...  
 け...

野津田 蟠齋石阪昌孝書  
  
  
  
 星...  
 新...  
 揚...  
 籍...  
 輝...  
 三...

之山故赤洋凡々  
 之體者歟  
 之...  
 之...  
 之...  


五...  
 集...  
 朗...  
 如...  
 前...  
 之...  
 之...  
 之...  
 之...  
 之...  
 之...

又音  
 武...  
 横...  
 五...  
 森...

又音  
 武...  
 横...  
 五...  
 森...